

思い出す人々



西山 厚 全24回

第19回 【南方熊楠】

平安時代に東大寺の大仏の頭が落ちた。

元に戻すのは大仕事。それをやり遂げたのは真如親王（高丘親王）だった。真如親王はそのあと唐へ渡り、さらに真実の仏法を求めてインドへ向かうが、マレー半島あたりで亡くなった。のちの時代になると、虎に食われたと言われるようになる。

澁澤龍彦の奇書『高丘親王航海記』では、病んで死期を悟った真如親王は、みずから進んで虎に食われ、虎の腹中に納まってインドに至ろうとする。

澁澤龍彦のノートに「虎に食われる＝天に上る」とあるのを見つけた。南方熊楠の著作からの引用だ。

昭和四年（1929）、昭和天皇が紀州の神島の植物観察に訪れた際の案内役が南方熊楠だった。雨の中、ふたりはずぶ濡れになって歩いた。このあと熊楠は、110種の粘菌を昭和天皇にプレゼントした。粘菌は森永キヤラメルのボール紙の箱に入れられていた。

雨にけふる神島を見て

紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ

昭和天皇の御製にみえる個人名はこれだけらしい。